

[デフォルト顔]

咲：無表情

ひかり：笑顔

部長：キリッとした顔

蓮：ツンツンした顔

クトゥルフちゃん：笑顔

[第1章]

(職員室)

木村先生

「お前が編入生か

編入そうそう遅刻とは面白いやつだな」

平山タカシ

「すみません」

木村先生

「気にするな、お前が極度の方向音痴だってことは聞いていたからな。

今から放課後のホームルームがあるから、そこで自己紹介しろ」

木村先生

「それじゃあ、教室行くか～」

(教室へ)

木村先生

「皆席に着け～

ホームルーム始めるぞ～

こいつ、今日からこのクラスに編入した平山タカシな。ほれ平山、挨拶しろ～」

平山タカシ

「あ、はい！

えっと、平山タカシです。よろしく」

(拍手の効果音)

平山タカシ

(ん？ 何だあの子は…)

皆が拍手をしている中、1人だけじっと座ったままこちらを凝視していた

平山タカシ

(見た目小学生っぽいけど、もしかしてこの子も同じ16歳なのか!?)

平山タカシ

(というか何でコッチじっと見てるんだ? 俺なんか可笑しい!?)

木村先生

「じゃあ、平山の席は1番奥の空いている席な」

平山タカシ

(助かった、1番後ろならあの子も見つめてきたりしないよな…)

木村先生

「今日は特に何も言うことねえな～

平山は何か分からないことがあれば委員長に聞け。

それじゃあ、皆仲良くしろよ～」

(足音効果音) (木村先生フェードアウト)

平山タカシ

(何か、気の抜けた先生だったな…)

??

「平山くんだったよね? はじめまして!」(まだイラストは画面には写さない)

ひかり

「私は今野ひかり

君と同じ2年A組で、委員長やっています!」(ひかり自己紹介スチル)

ひかり

「先生から君のサポート役を頼まれてるんだ。

だから何か困ったことがあったら、私に相談して欲しいな♪」(ひかり自己紹介スチル)

平山

「ああ、よろしく

えっと…ひかりちゃん?」

ひかり

「あはは、ひかりでいいよ!

そしてこの子は私の親友の山中ユエちゃんです!」

ユエ

「ユエ…です……

よろしく………」(ユエ自己紹介スチル)

平山タカシ

(あ、さっき俺の事凝視してた子だ)

---選択肢---

よろしく

さっき俺の事みてたよね？

かわいい名前だね

【よろしくの場合(0)】

平山タカシ

「よろしく……」

平山タカシ

(さっきのこと気になるけど、聞かないでおいた方がいいよな…)

【さっき俺の事みてたよね？の場合(+3)】

平山タカシ

「よろしく。」

ねえ、俺の自己紹介の時、ずっとこっちみてたよね？」

ユエ(慌ててる ver)

「……………！」

……み、見てない…」

平山タカシ

「そ、そうか」

平山タカシ

(聞かないほうが良かったか…)

【可愛い名前だねの場合(-3)】

平山タカシ

「よろしく

ユエって、なんか可愛い名前だね！」

ユエ

「……………」

平山

(あれ…？何か若干引いてるような…)

ひかり

「ああ～、ごめんね平山くん！

ユエちゃんって結構人見知りで、いつもこんな感じなんだ」

【分岐終了】

ひかり

「ところでさ、平山くんはどこの部活に入るかってもう決めたかな？」

平山タカシ

「いや、部活に入るつもりはないよ」

ユエ

「うちの学園…部活必須……」

平山タカシ

「必ず何処かに所属しなきゃいけないってことか？

マジかよ……………どうすっかなあ」

ひかり

「そこでどうかな？

部活体験なんてしてみない？」

平山タカシ

「そうだな……折角だし、やってみようかな？」

ひかり（笑顔 ver）

「そうこなくっちゃ！

じゃあ、早速案内するよ！ ユエもくる？」

ユエ

「ううん、先に部室行ってる」

ひかり

「そっか、また後でね！」

ユエ

「ん…」

（足音）（ユエフェードアウト）

ひかり

「よし！早速行こうか！

平山くんはどんな部活に興味あるかな？」

平山タカシ

「うーん、特に考えなかったからなあ」

ひかり

「平山くんは確か舞台芸能科だったよね？」

それなら、演出技術を向上できる部活なんてどうかな？」

平山タカシ

「ああ、それもいいかもな」

ひかり(笑顔 ver)

「決まりだね！」

そんな君にピッタリな部活が1つあるから、そこに案内するよ！」

平山タカシ

「ありがとう」

ひかり

「いえいえ、これも委員長のお仕事ですから♪」

---分岐---

頑張ってるんだな

偉いな

疲れないか？

【頑張ってるんだな(0)】

平山タカシ

「ひかりはよく頑張ってるんだな」

ひかり

「頑張るっていうか、好きでやってるみたいなのところがあるからね。

皆の役に立てることが嬉しいんだ」

【偉いな(+3)】

平山タカシ

「そうか、偉いんだな」

ひかり(照れ ver)

「ふえっ

そ、そう純粋に褒められると照れちゃうな」

【疲れないか?(-3)】

平山タカシ

「そんなに頑張って、疲れないか？」

ひかり

「好きでやってる事だからね  
疲れたとか思ったことはないよ」

平山タカシ

「そうか、ひかりは凄いんだな」

ひかり(照れ ver)

「えへへ、ありがとう」

【分岐終了】

ひかり

「さあ、ここが君に案内したかった部活、  
[軽音楽部] だよ！」

平山タカシ

(ん…………？ 演出の要素は一体どこにいったんだろう？)

ひかり

「さあ、入って入って～」

(扉を開く音)

ひかり

「部長～！  
新入部員1人連れてきました～！」

平山タカシ

「えっ！いや、俺はまだ入るとは」

ユエ

「タカシくん…」

平山タカシ

「ユエ…お前軽音楽部だったのか」

ユエ (笑顔 ver)

「ん！ボーカルやってる」

ひかり (笑顔 ver)

「ちなみに私はギター担当なんだよ！」

平山タカシ

(ここ、ひかりの部活かよ…

というか、ユエがボーカル……？

そ、想像つかないな)

??

「新入部員だと？」

うちの部活は少数精鋭でな。

人手は足りてるんだ、他を当たってくれ」

平山タカシ

「いや、俺は…」

ひかり

「いやいや、部長！」

平山くんは楽器担当じゃないですよ。コンサートの演出担当です！」

部長

「演出だと？」

ひかり

「部長この間呟いてたじゃないですか。

もっとお客さんを喜ばせる何かをしたいって！

そこで、演出科の平山くんの出番って訳ですよ！」

平山タカシ

「だからまだ入るとは…」

部長

「演出がなんだ

そんなもので客が喜ぶわけないだろう」

平山タカシ

(んん?)

部長

「客は私たちの音楽を聞きに来るんだ

演出をどうこうしたところで何にもならん。

元あった場所に返してきなさい」

平山タカシ

「俺は犬かよ!!!」

平山タカシ

(何なんだこいつは…ムカつくことばっか言いやがって)

ひかり (がっかり ver)

「そんな～！折角連れてきたのに～」

ユエ

「部長…」

部長

「どうした、ユエ？」

ユエ

「見てないのに…否定するの……よくない」

部長(ビックリ ver)

「……………」

ふっ、お前が私に意見するなんてな…

珍しいこともあるものだ」

部長

「なるほど、確かにユエの意見も最もだ……

よし、ではこうしよう！

明日の昼休みの路上ライブで、平山に演出してもらおう」

部長

「いつもの倍の人数を集めることが出来れば合格だ。お前の入部を許可してやろう」

平山タカシ

(いや、だから別に入部したい訳じゃないんだけど……………)

ユエ

「望むところ…

タカシの演出にかかればいつもの2倍なんて余裕に超えられる」

平山タカシ

(そしてなんでユエはそんなに自信満々なんだよ……………)

平山

(まあ……ここまで言われて、期待に答えられない訳にはいかないよな)

平山

(単純に部長の鼻っ柱へし折ってやりたいってのもあるし)

平山タカシ

「分かりました。受けてたちます！

もし合格したら演出を馬鹿にした事、謝ってくださいね」

部長 (にやり ver)

「ああ、いいとも

合格できればだがな…」

部長

「自己紹介が遅れたが、私は部長の明石優。

ベース担当だ。」(部長自己紹介スチル)

部長

「ちなみに、生徒会長も兼任している。

多分よろしくすることはないだろうから覚えなくても良いぞ？」(部長自己紹介スチル)



平山タカシ

「御丁寧にどうも

俺は平山タカシ

貴方の鼻っ柱へし折るやつの名前は覚えておいたほうがいいですよ？」

部長（怒り ver）

「ふふふ」

平山タカシ

「ははは」

明石（怒り ver）

「ふふふふふふふ」

平山タカシ

「はははははは」

明石、平山（怒り ver）

「ふははははははは！！！！」

ひかり(焦る ver)

「ああ～、お互いに良かれと思って連れてきたのに、大変なことになっちゃったよ～」

～翌日～

部長

「来たな編入生」

平山タカシ

「ええ、なぜか会場にたどり着かなくて 30 分くらい彷徨いましたがね」

??

「へえー、君が噂の編入生くん？」

萩原葵

「」（クトゥルフ自己紹介スチル）

平山タカシ

「よろしく」

??

「ここまで来るのに 30 分も掛かるなんて、相変わらずですね」

平山

「……………!!!？」

なっ、何でお前がここに居るんだ!!!？」

??

「私もこの部活でキーボード担当してますからね」

ひかり

「蓮ちゃん、平山くんと知り合いなの？」

蓮

「……………兄です……………」

全員（驚き ver）

「あ、兄————!!!?」

蓮（怒り ver）

「言っておきますが、私は兄さんと同じ部活なんてやりたくありません！

話を聞く限りどうせまた演出馬鹿にされたことに怒って勝負を受けてしまったのでしょ

蓮（呆れ ver）

「貴方の悪い癖です。

そんな輩は放っておけば良いと毎回言っているのに……………」

蓮(怒り ver)

「兎に角、今日は本気出さないでくださいよ！

兄さんが本気でしたら大変なことになるんですから」

平山タカシ

「だが断る！

確かにこの部活に入る気はないが、演出で手を抜くなんてことはしたくないんでね」

蓮（照れ ver）

「はぁ…、そこも兄さんの悪い癖ですね。

まあ、そんなところが好きなんですけど……………」

平山タカシ

「ははは、心配してくれてるのか～？

愛いやつめ！

本当に蓮は可愛いなぁ～！」

蓮(照れ ver)

「ちょ、撫でないでください。

に、兄さん！！」

部長

「ごほん！

……………お前達がシスコンとブラコンなのはよくわかった。

だから、そろそろ2人の世界に入るのはやめにしないか？」

蓮（驚き ver）

「べ、別にブラコンじゃありません!!!!!!」

平山タカシ

「突っ込みどころはそこだけじゃないと思うけどなあ  
やっぱり蓮は可愛いなあ〜」

ユエ

「……………」

平山タカシ

「ん？ どうした、ユエ？」

咲(照れ ver)

「!!…べ、別に何でもない……」

平山タカシ

「そうか…」

部長

「時間も迫っていることだし、早速説明しよう」

---音ゲー説明---

部長

「君はこれで舞台を演出してもらおう。  
やり方は知っているな。」

---分岐---

知ってる

知らない

【知ってる】

平山タカシ

「ああ、大丈夫だ」

部長

「よろしい。では始めるぞ。  
今回やる曲は「○○○」だ。  
せいぜい足掻くんだな、編入生」(参考音源流す)

【知らない】

平山タカシ

「見たことないやつだな」

部長

「なに？ まあ、古いタイプだから仕方が無いか…」

部長

「一回しか説明しないから心して聞けよ？」

音ゲールール説明

部長

「説明は以上だ。

今回お前に演出してもらった曲はこの曲だ。

心してかかれよ」(参考音源流す)

【分岐終了】

音ゲー開始

音ゲー終了

---分岐---

S、A ランク

B、C ランク

D ランク

【S、A ランク】(全員の好感度+5)

観客

「何か今日のコンサートすげえかっこよかったな」

観客

「今まであんまり気にしたこと無かったけど、私これから毎週見に行くよ！」

ひかり(驚き ver)

「な、何これ……………」

葵(驚き ver)

「いつもの2倍どころじゃないよ、

これ、3倍くらいいってるんじゃない？」

ユエ

「さすが…タカシ」

蓮(どや顔 ver)

「ふん！これくらい兄さんレベルならチョロいもんです！」

部長

「……………」。

平山タカシ！」

平山タカシ

「はい！」

部長

「昨日からの発言、撤回する。これを見せられたら認めるしかない」

部長 (笑顔 ver)

「私が間違っていたようだ。すまなかった」

平山タカシ

「先輩……」

こちらこそ、先輩に失礼な態度をとって、すみませんでした」

ひかり

「うんうん！感動的光景だね！

それじゃあ、改めまして」

全員(笑顔 ver)

「ようこそ、軽音楽部へ！」

【B、C ランク】(全員の好感度+-0)

部長

「ふむ……。なるほど、演出を加えるだけでここまで変わるとはな」

部長

「確かに、私が間違っていたのかもな……」

お前の実力、しかと見せてもらった！

昨日の発言はすべて撤回する。すまなかった」

部長

「これからよろしく頼む」

平山タカシ

「部長……」

平山タカシ

「こちらこそ、よろしく願いたします！」

ひかり

「うんうん、すてきな光景だね！

ではでは、改めまして」

全員(笑顔 ver)

「ようこそ、軽音楽部へ！」

【D ランク】(全員の好感度-5)

部長

「まあ、及第点といったところか」

部長

「私に二言は無いからな。

君の入部を認めよう。これからよろしく頼む」

平山

「まだまだこれからです。いずれぎゃふんと言わせてやりますよ！」

ひかり

「うんうん！その調子だよ！」

ひかり

「ではでは、改めまして」

全員(笑顔 ver)

「ようこそ、軽音楽部へ！」

---分岐終了---

(舞台片付け中の背景)

平山タカシ

(ステージ終わった後って何かさみしくなるよなあ……)

---分岐---

平山タカシ

(あれ…？ ユエがいないな)

(この部に連れてきてくれたひかりにお礼でも言いに行くか)

(入部決定したことだし、改めて部長に挨拶しておくか)

(運のやつ、重そうな機械運んでるな)

(葵???) (松本制作)

【あれ…？ ユエがいないな】

平山タカシ

(あれ…？ ユエがいないな)

平山タカシ

「部長、ユエの姿が見えないですけど……」

部長

「なに？ 全くあいつは…

すまないが、あいつを呼んできてくれないか？

たぶん中庭にいると思うんだが…」

平山タカシ

「わかりました。行ってきます」

(教室)

平山タカシ

「……………」

平山タカシ

「しまった…昨日の件ですっかり忘れていたが俺、方向音痴だった……………」

平山タカシ

「…………みんなのところに戻るか」

(生徒会室)

平山

「ここはどこだ…」

(図書室)

平山

「ここでもない……………」

(中庭)

平山タカシ

「だから、ここはどこなんだ!!!!!!」

ユエ

「タカシ…………? どうしたの?」

平山タカシ

「ユエ!!! 助かった!!」

平山タカシ

「頼むユエ、俺をみんなの元まで連れて行ってくれ!!!」

ユエ

「いいけど…………なんでこんなところにタカシが?」

平山タカシ

「いや、片付け中にユエの姿が見えなかったから探しに来たんだが」

平山タカシ

「俺が迷子になった」

ユエ

「タカシ、方向音痴だもんね…」

ユエ

「探しに来てくれてありがと」

平山タカシ

「そういえば、ユエはいつもステージ終わったらここに来てるのか？」

ユエ

「ん。ここは涼しいから…気持ちを落ち着けるのにちょうどいい」

ユエ

「今日はタカシにサポートしてもらえたから、まだ気持ちが高ぶってる……」

平山タカシ

「そういえばずっと気になってたんだが、  
ユエはなんでそんなに俺に好意的なんだ？」

ユエ

「……………!!」

咲

「…えっと……………」

咲

「その……………」

咲

「ず、ずっと…」

咲

「ファ、ファンだった…から……………」

平山

「ファンって…俺の事知ってたのか？」

咲

「もちろん！」

咲

「〇〇学院芸能芸術科所属平山タカシ。身長 184cm 体重 60 kg。両親共に芸能界の仕事に携わっていたため、幼い頃からこの業界に携わっていた。今までにない発想でこの業界に新しい風邪を巻き起こした天才少年。学院には秘密裏にファンクラブも結成されている。今まで一人暮らしだったが、両親が海外へ転勤し家を空けるため、妹を心配し実家に戻る超絶シス



コン。実家から学院に通うには遠すぎるため、妹と同じ△△学園へ編入し」

平山

「まてまてまてまて！」

平山

「ファンクラブってなんだとか、お前そんなに喋るヤツだったのかとか色々突っ込みたいところはあるんだがとりあえず」

平山

「俺の個人情報ダダ漏れじゃねえか!!!!!!」

咲

「ちなみに天才少年と崇められているものの、発想が斬新すぎて失敗することも多々ある」

平山

「うるさいわ!!!!」

咲

「でも、私は周りが失敗といったステージで、貴方に惚れた」

平山

「…っ!!!」

咲

「当時の私は驕ってたの。私は歌が上手いから…今すぐ芸能界に入ってももやっていけるって信じてた。だけど、先生はそれを許してくれなくて……………」

咲

「先生を見る目がないバカだと思った…人知れず壊してあげようとも思ってた……………」

咲

「そんな時に先生がチケットをくれて、勉強してこいって言われたの」

咲

「たかが学生のステージで学べるものなんて何もない…

帰ったら先生をボロクソに言ってやろうって思いながら行ったの……………」

平山

「おい」

咲

「でも、言えなかった……………」

咲

「気づいたの…私がなんで芸能界に入れないのか……………」

咲

「貴方の作ったステージは、何を表現したいのか全然分からなかった。

皆が言う通り失敗だった。ボーカルなんて私の方が何十倍も上手い」

咲

「でも、それでも、皆が笑ってて、楽しそうで……………」

私が開いてるステージよりも何十倍も光り輝いてた……………」

咲

「ああ、私の足りないものは……………お客さんを思う気持ちだったんだって…分かったの」

咲

「それから貴方のことを調べて、ずっと追いかけてきた……………」

咲

「そしたら、同じ学園に来てくれて、あまつさえ私のステージに携わってくれることになっ  
て……………」

咲

「嬉しかった……………」

咲

「だから、ありがとう……………」

平山

「咲……………」

咲

「ふふふ……………」

(バタンッ)

(倒れる音)

平山

「さっ咲!!? おい! 急に倒れてどうした!!

もしかして、何か持病でも抱えて…」

咲

「ひ…」

平山

「ひ…?」

咲

「久しぶりに喋ったから……………疲れた……………」

平山

「おい」

平山

「お前仮にもボーカルだろ」

咲

「う、歌と言葉は違う……」

平山

「すまん、分からん」

平山

「はー…なんか気が抜けたわ」

咲

「ううう…かっこよく決めようと思ったのに」

平山

「はいはい、分かったからお前は喋るな。

お前の気持ちは十分に伝わったから」

平山

「ありがとな」

咲(照れ)

「うん……」

ひかり

「こら～！ いつまでそこにいるんですか～！

片付け終わっちゃいましたよ～～!!!」

部長

「まったく、迎えに行ったお前までサボってどうする」

平山

「ひかり、部長！」

葵

「遅いから迎えに来ちゃった～」

蓮

「よかった、ちゃんと中庭にたどり着いていたんですね、兄さん」

平山

「すまん、ユエとしゃべってたらすっかり用事を忘れてしまった」

ユエ

「ごめんなさい」

部長 (笑顔 ver)

「まったく、しょうがない奴らだな」

ひかり

「二人の仲が深まって良かったですね～

ね、部長」

部長

「なぜ私に言う」

ひかり

「ふふふ～」

部長（照れ ver）

「……」

葵

「何はともあれ、片付けも終わったし

今日は解散だね～」

蓮

「はい。また明日からよろしくお願ひします」

部長

「ああ、タカシも入部したことだし、明日から本格的に音楽祭に向けて活動していくぞ」

ひかり

「みんなでいっしょにがんばろ～！」

全員

「おお～！」

（第1章 終）

【この部に連れてきてくれたひかりにお礼でも言いに行くか】

平山タカシ

（この部に連れてきてくれたひかりにお礼でも言いに行くか）

平山タカシ

「ひかり、今いいか？」

ひかり

「うん、ちょうど片付け終わったから全然大丈夫だよ！どうしたのかな？」

平山タカシ

「その、お礼を言わなきゃと思ってな。

この部活に連れてきてくれて、ありがとう」

ひかり

「!!」

平山タカシ

「お前のおかげでこの学園でも楽しくやっていけそうだよ」

ひかり（しょぼん顔）

「……ううん、お礼を言われるようなことはしてないよ…

タカシくんを連れてきたのは、私のためだったから。

……ごめん、平山くんを利用したの。」

平山タカシ

「利用……？」

ひかり

「ずっと部長の役に立ちたいと思ってて、平山君は部長の役に立ってくれそうだったから君をここに連れてきたんだ。私のためにね」

ひかり

「もし今日のステージで役に立たないと判断したら、君をこの部活から排除しようとも思ってた」

平山タカシ

「よくわからないが、

部長の合格ラインに達してなかったら排除も何もなかったんじゃないか？」

ひかり

「部長は優しいから、あんなこと言っても最終的には君を受け入れてたよ」

平山タカシ

「それで、優しい部長の代わりにひかりが俺を追い出そうとしたってことか」

ひかり

「今日のステージを見て、その考えは改めたけどね」

平山タカシ

「それはよかった」

平山タカシ

「ちなみに追い出すとしたら、どういう方法を使うつもりだったんだ？」

ひかり

「方法なんていくらでもある。事故にあわせて入院させたり、周りを使って登校拒否に追い込んだり……

私、そういうおトモダチいっぱいいるんだよ？」

平山タカシ

「入部しようとしただけでかよ……

なんでそこまでするんだ？ 一歩間違えればお前が退学になるんだぞ」

ひかり

「私ね……」

ひかり

「部長、優さんのことが好きなの」

平山タカシ

「すき…って……」

ひかり

「ライクじゃなくてラブの方」

ひかり

「優さんのためならなんでもする。

優さんが笑ってられるなら、私はどうなっても構わない」

平山タカシ

「それでお前は幸せなのか？」

ひかり

「もちろん」

平山タカシ

「そうか」

ひかり

「……………」

平山タカシ

「……………」

ひかり

「それだけ？」

平山タカシ

「何が？」

ひかり

「もっと他に言うことあるでしょ!？」

ひかり

「私、君にひどいことしようとした。

君だけじゃない！たくさんの人を傷つけてきた!!!」

ひかり

「普通何か言うでしょ!？」

「そんなことはやめろ」とか、「それでお前が幸せになれるはずがない」とか!!!!」

平山タカシ

「俺がそう言ったとして、お前はやめるのか？」

ひかり

「やめるわけじゃない」

平山タカシ

「だろうな。じゃあ、そんなこと言ったって意味ねえじゃん」

平山タカシ

「どうせ、そういう言葉はずっと言われてきたんだろ？

それでも止めなかったからこうなってるんだろ？」

ひかり

「……………」

平山タカシ

「ずっとやめなかったのに、会って1日足らずの俺に言われて止めたら逆に怖いわ」

平山タカシ

「確かに、お前のやってることは間違ってると思うよ。

でも、俺はお前を止められねえよ」

平山タカシ

「お前がお前を止めてやらねえと、どうしたって今のままだ」

平山タカシ

「お前も他人を傷つけるのはもう止めたいんだろ？

じゃなきゃ、俺にこんなこと言うわけねえもんな」

ひかり

「違う!!!止めたいなんて思ったことない!!!!」

平山タカシ

「じゃあ、なんで俺に伝えたんだ？

俺にこんなこと教えて、損以外の何ものでもないじゃないか」

ひかり

「そ、それは…」

平山タカシ

「助けて欲しかったんだろ。誰でも良いから、止めて欲しかったんだろ？」

ひかり

「わ、わたしは……………」

平山タカシ

「別に、ここにいる奴らはお前が同性を好きになるって知ったって

何も変わらないと思うがな」

ひかり (泣き顔 ver)

「……………っ」

ひかり

「最初は、ただの嫉妬からだったの」

ひかり

「私は好きになった人と友達以上にはなれないのに、好きってばれないように努力しないといけないのに、男の人は男ってだけでぐいぐいアピールして、その上付き合うことだってできる」

ひかり

「許せなかった」

ひかり

「私の方が好きなのに、私の方が彼女のことをよく知ってるのっ!!!」

ひかり

「だから、近づけないようにしてやったの。私ですら友達以上になれないのに、彼女のことをよく知りもしない人が近づくなっておこがましいでしょ？」

ひかり

「そうやって始めたら止まらなくなって……

気がついたら自分でも止められなくなって……」

ひかり

「……………」

平山タカシ

「はあ……お前は周りに気を遣いすぎるんだよ。

もっと力を抜いて生きてみるよ？

意外とお前が思ってるよりこの世界は寛容だぞ」

ひかり

「……私そんなに力入ってるように見えた？」

平山タカシ

「ああ、ガッチガチに堅かったな」

ひかり（笑顔 ver）

「あはは、なにそれ。

なんか…君をみてたらバカらしくなってきたよ」

平山タカシ

「お、そうそう、そんな感じ」

ひかり

「ちょ、なんで頭撫でるの」

部長

「お前ら、なにしてる」

ひかり

「…っ!! 部長、これは」



平山タカシ

「ひかりにお礼言ってただけですよ」

部長

「お礼？」

平山タカシ

「ええ、この部活に連れてきてくれたお礼。

ここに入部できて最高ですわ」

部長（照れ ver）

「そ、そうか。そう言ってくれると部長として嬉しいよ。」

葵

「何しゃべってるの～？ 片付け終わったし、早く帰ろ～」

部長

「ああ、そうだな、明日からは音楽祭に向けて本格的に活動していくから覚悟しておけ」

平山タカシ

「望むところですよ。な、ひかり！」

ひかり

「!!..... うん、そうだね、みんなで頑張っていこうね！」

全員

「おおー！」

（第1章 終）

【入部決定したことだし、改めて部長に挨拶しておくか】

平山タカシ

（入部決定したことだし、改めて部長に挨拶しておくか）

平山タカシ

「部長、今お時間良いですか？」

部長

「ああ、構わんが？何か問題でもあったか？」

平山タカシ

「いえ、改めて挨拶しようと思ひまして…

昨日は失礼な態度をとってしまいましたし」

部長

「いや、あれは私がそうさせてしまったからな…

私の悪い癖だ。つい、キツイ言葉を吐いてしまう」

平山タカシ

「別に、悪いとは思いませんけどね」

部長

「なに？」

平山タカシ

「そりゃ最初はむかつきましたけど、

先輩のことを知ればそんな気持ちは全くなくなりましたね。

むしろかわいいと思いますよ」

部長（照れ ver）

「か、かわ」

平山タカシ

「ほら、そういうところ。

先輩って言葉はキツイのに中身はめっちゃくちゃ純情でかわいらしいですよね」

平山タカシ

「俺、まだ先輩のことよく知りませんが、すでに先輩のこと好意的に思ってますもん。

たぶんこれからもっと先輩のこと好きになっていくんだって確信してますよ」

部長

「そ、そうか……ありがとう……」

平山タカシ

「いえいえ、これからも仲良くしてくださいね」

部長

「う、うん」

葵

「ぶちよー、片付け終わったよ〜」

部長

「そ、そうか」

蓮

「部長、どうしましたか？ 顔が赤いですよ？」

ユエ

「風邪ひいた…？」

部長

「べ、別になんでもない！」

葵

「ねえねえ、そんなことより早く帰ろ〜よ〜」

部長

「そうだな、明日からは音楽祭に向けて本格的に活動していくから覚悟しておけよ」

蓮

「承知しました」

ひかり

「よーし！みんなで一緒に頑張ろうね！」

全員

「おお～！」

(第1章 終)

【蓮のやつ、重そうな機械運んでるな】

平山タカシ

(蓮のやつ、重そうな機械運んでるな…

手伝いに行くか)

平山タカシ

「蓮、手伝うよ」

蓮

「兄さん、ありがとうございます」

平山タカシ

「いえいえ、それにしてもお前が軽音楽部だったとは知らなかったぞ」

蓮

「兄さんに言ったら毎回見に来られそうだったもので」

平山タカシ

「当たり前じゃないか！

今までのステージが見られなかったと思うだけで泣きそうだよ…」

蓮

「……兄さんに初めて見てもらう時は最高のステージを届けたかったんですよ」

平山タカシ

「蓮……」

平山タカシ

「俺はお前が成長する姿も見たかったぞ」

蓮

「…シスコン」

平山タカシ

「…ブラコン」

蓮

「はあ……、これからはずっと私のステージを見れるんですから、それで我慢してください」

平山タカシ

「ああ、しかもお前のステージに携われるもんな。

……昔の約束覚えてるか？」

蓮

「ええ、もちろん。兄さんが演出するステージで、私がピアノを弾く。

そんな約束をしましたね…」

平山タカシ

「こんなところで叶うとは思わなかったよ」

蓮

「私たちの部活で行う一番大きな舞台は音楽祭です。

最高のステージにしてくださいね、兄さん」

平山タカシ

「ああ、最高のステージで演奏させてやるよ」

蓮

「楽しみにしています」

葵

「れんれん～、やまやん～

片付け終わった～？」

蓮

「コレを運び終えたら終わりです」

葵

「私お腹減った～」

蓮

「はいはい、もうちょっと待ってくださいね」

部長

「片付けが終わったら今日は解散だ。明日からは音楽祭に向けて本格的に活動していくから覚悟しておけよ」

蓮

「のぞむところです。頑張りましょうね、兄さん」

平山タカシ

「ああ」

(第1章 終)